

## 『アン・ハッチンソンとピューリタンの宗教思想』

—神とどのように向き合うのか？魂の平和を追求した

—ある女性宗教活動家のその生涯と思想—

本論文の目的は、17世紀初頭のアメリカのボストンで起こった宗教的理由に基づく追放劇の歴史的意義を研究するものである。1638年3月、アンチノミアン騒動と呼ばれるできごとの中で、アン・ハッチンソンという名前の女性が、初期アメリカのピューリタン社会の一つであるマサチューセッツ湾植民地政府によって、追放の刑を受けた。彼女の罪状は、教会と牧師を侮辱したというものであった。

何故、ハッチンソンを敢えて追放という重罰に処し、排除しなければならなかったのか。彼女の罪とは何であったのか。そして、彼女の言動が初期植民地社会に何を引き起こし、次の時代にどうつながっていったのか。本論文で検討するのは以上のことある。

ハッチンソンの追放は、マサチューセッツ湾植民地を揺るがす大事件であったため、同時代から数多くの文献が存在する。しかし、彼女への学問的関心が始まるのは、1930年頃である。これを境に彼女の評価が変化していった。1930年以前の研究では、アンチノミアン（無律法主義者）をマサチューセッツの存続を脅かす危険な人々と捉え、彼女を批判的に見たものが主流であった。しかし、1930年以降は、時の権威者たちに挑んだ勇気を肯定的に捉えた評価が増えていった。さらに、1960年代の権利革命の頃には、ハッチンソンは多くの女性史研究者の関心を集め、彼女の言動を性差の観点から論じた研究が主流になった。その中で、ハッチンソンは、ジェンダーのパイオニアとして評価されている。

確かに、彼女の考えは、女性の宗教界への進出につながった。しかし、著者は、これは彼女が主導した宗教的自由という考えが成熟したことを物語っていると捉えている。

実際、彼女の思想は、階級、性差、人種を越えた「市民の自由」として後の合衆国憲法に組み込まれていった。「神とどのように向き合うのか」という問いに対して、自分の思想を頑固なまでに貫き通したハッチンソンだからこそ、民主主義の発展の契機となる第二次大覚醒の先駆けとして、今、再評価されている。

生活のレベルや信仰の程度では同質的な集まりではなかったものの、マサチューセッツ湾植民地の構成員たちは多くがピューリタンであった。ウインスロップ総督たちは、秩序ある社会づくりを目指し、ピューリタンを治めるためのエリートによる政治を進めた。

入植当初は、統制のとれた社会作りをする余裕はなかったため、人々は、時には戦い、時には妥協しながら、神の御旨に叶う社会作りに邁進した。

このように大変不安定な社会であったため、人々の最大の関心事は神からの救済であった。当時、救済の思想は大きく二派に分かれていた。一方は、救済準備主義と呼ばれる思想である。この代表が総督であるウインスロップであった。もう一方は、信仰至上主義と

呼ばれる思想である。この代表は、ハッチンソンであった。

二つの思想は各々の正当性を主張するため議論が活発に行われていたが、互いの主張は交わることができず、この考えの平行線が、後に大きな混乱を生じさせる要因となった。本論文で取り扱う追放劇の原因になったのは、まさにその救済に対するハッチンソンとウィンスロップの思想の違いであった。

ウィンスロップの思想は、社会が秩序のあるものになるため都合のよいものであった。彼は、不平等な一方、よく組織された社会を理想とした。この思想に抵抗する者は、異端者として排除しようとした。

一方、アンチノミアンであるハッチンソンの思想の根底には、「個人の内なる良心の自由な行為である信仰の問題に対して、権力は介入できない」というルターの思想があった。そして、人間はただ信仰を行うのみであるとし、救済を受ける資格は全ての人にあるという宗教の自由性を主張した。この彼女の主張は、当時の政治体系を脅かすものであった。従って、彼女の考えに同調する者が増えていくことは、政府にとって憂慮すべき事態であった。

こうした両派の対立が爆発したのがアンチノミアン騒動であった。それは、1636年から1638年にかけて起きたピューリタン社会を揺るがした大事件であった。この騒動は、ハッチンソンが開いた勉強会が発端になった。この会はたちまち人気を博し、ハッチンソンの考えに賛同する勢力が拡大していった。このことに政府や教会は危機感を持ち、ハッチンソン派の締め付けの後、最後に、首謀者であるハッチンソンを法廷に出頭させた。そして、ハッチンソンが語った宗教体験を理由に、異端の思想として、追放という重い刑に処せられた。

彼女の考え方は、そもそもピューリタンの基本的な考えであった。しかし、理想の社会を作ろうとすると、その考えは社会づくりの妨げになった。彼女の引き起こした騒動は、ピューリタンたちが本来持っていた宗教的自由という考えを人々に改めて思い起こさせた、重要な意味を持つできごとであったと考える。

現在、アメリカは、世界のリーダーとして君臨している。このようなアメリカの繁栄には、ウィンスロップたちが苦心して作った共同体の働きが根底にある。実際に、アメリカでは、今でも宗教が国民生活に大きな役割を果たしている。

世界が自国を強固にすることだけを考えていた時代は、今ほど、国際間のつながりは要求されなかった。しかし、国際化が進んだ今、アメリカが世界のリーダーとして振る舞うためには、異質な価値との共生ができる度量の大きさを育むことが課題であろう。そして、それを受け入れる寛容な社会と、それを実践する市民を育成していくことが鍵となると考える。言い換えると、ハッチンソンの考えを受け入れ、彼女を偉大な人物として賞賛するような時代がやっと到来したということであろう。